

吉備池廃寺きびいけはいじ

- | | | |
|---|---------------|------------------------------------|
| 1 | 所在地 | 奈良県桜井市吉備 |
| 2 | 調査期間 | 第三次調査 一九九九年（平11）一月～四月 |
| 3 | 発掘機関 | 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部・
桜井市教育委員会 |
| 4 | 調査担当者 | 代表 黒崎 直 |
| 5 | 遺跡の種類 | 寺院跡 |
| 6 | 遺跡の年代 | 七世紀 |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | |



(桜井・吉野山)

岸工事に伴う一九九七年の調査によつて発見された、七世紀中頃の寺院跡である。池の南岸に張り出すように、二つの土壇が残っていたが、東の土壇は九七年の第一次調査により、東西三七m南北約二八mという巨大な基壇であり、南面する金堂跡と判断した。西の土壇は翌

年の第二次調査で、一辺三〇m近い方形の基壇となり、その中央部に巨大な礎石抜き取り穴を確認したことなどから、これを塔跡と考えた。出土した軒瓦の年代と基壇規模および想定される伽藍の巨大さなどから、この寺院跡は舒明天皇が発願し六三九年から造営が始まったという「百濟大寺」の可能性が高いと判断した。

今回の第三次調査は、第二次調査で一部確認していた南面回廊と中門、および西面回廊の検出を目的として実施した。発掘面積は七二〇㎡である。

調査の結果、塔跡の南約五六mのところ、基壇幅五・六mの南面回廊を検出したが、それは伽藍中軸線を越えて一直線に伸び、そこに中門は開かないことが明らかとなった。西面回廊は残りが悪いものの、その東雨落溝とみられる溝を検出したので、塔心より約四〇m西の位置を回廊が通っていたと推定する。木簡は、西面回廊の西にある東西方向の溝から一点出土した。同溝は幅約二m深さ〇・二mの素掘り溝で、藤原京期の須恵器などが伴出した。

8 木簡の釈文・内容

(1)

(135) $\times 19 \times 4$ 019

9
関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報一九九〇—
Ⅱ』（一九九九年）（寺崎保広）